



Title	衛生害虫とのつきあい四半世紀
Author(s)	高浜, 雅昭
Citation	makoto. 1993, 83, p. 7-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85928
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

衛生害虫とのつきあい四半世紀

大阪府営箕面公園昆虫館長

高 浜 雅 昭

早いものです、大東保健所から箕面公園昆虫館に転勤してきてほぼ2年を過ぎました。

その間に昆虫館も大きく変わりました。昨年7月に従来の昆虫館に放蝶温室・研修室・展示コーナー等を加えてリフレッシュオープンしました。昆虫館については後段で詳しく説明することにしまして、まずは表題のことから入りたいと思います。

私が府庁に入りましたのは高度経済成長末期の公害問題のはなばなしの昭和40年4月でした。その年の11月に新入職員研修を終え環境衛生指導員として泉大津保健所に赴任しました。ここで先輩の教えを受けながら環境衛生行政（営業六法・廃棄物処理法・水道法・温泉法等の法律、遊泳場・再生資源等の府条例、ねずみ衛生害虫駆除指導等々）を見よう見まねで勉強していったわけです。衛生行政26年間で泉大津保健所をふりだしに八尾保健所、環境衛生課、豊中市、枚方保健所、門真保健所、大東保健所と勤務先をかかりました。この間のねずみ衛生害虫駆除指導の思い出を忘れかけた記憶の中から振り返ってみたいと思います。

1. 環境衛生推進モデル地区指定とカ・ハエの発生状況の調査事業（泉大津保健所当時）

この事業は昭和30年に厚生省が提唱した「蚊とハエのいない生活実践運動」の一環で都道府県、保健所、市町村の協力のもとに地区衛生組織によって推進されたもので、毎年府下で3か所の地区が選ばれ本事業を実施してきた。昭和41年度は泉大津保健所管内の高石市の一地区が選ばれました。私も保健所の仕事はカとハエを捕獲器で捕らえその種類、数を調べることでした。調査期間は春から秋まで毎週1回実施し、調査方法はカの場合は野沢式のライトトラップを一晩つけて翌朝回収する、ハエの場合は金網式のはえとりかごを朝から夕方まで設置し夕方回収する方法と、はえとりリボンを1週間設置し回収する方法でした。市と地区衛生組織はカとハエの

駆除を実施しました。

下水道の普及率もわずかで家庭の便所も大部分がくみとりで、周辺の水路も開渠のまま汚れのひどい当時はトラップにかかるカとハエの数は大変多く、極端に多い時は一定数の重量をはかり概数で計算したことも多かったように記憶しております。

2. ドクガ駆除対策事業（環境衛生課当時）

毒をもつガの仲間では代表的なものとしてはドクガ類（ドクガ・チャドクガ）とイラガ類です。このうちドクガは昭和30年代に大阪府下の丘陵地帯を中心に大発生をし、被害が急増したため昭和40年代になって駆除を実施した市町村にたいして府が補助金を出す制度を設けました。40年代後半にはこの制度は打ち切られましたが、府下衛星都市の丘陵地は宅地化を中心とする開発によって発生する土地すら奪われた昆虫類が他にも多かったのではないのでしょうか。

3. シバンムシアリガタバチによる被害（環境衛生課当時）

昭和50年代に入るとすぐにシバンムシアリガタバチによる被害が急増し、みるまにねずみ衛生害虫駆除指導件数のベスト3入りしました。シバンムシ類に寄生するこの小さな銜色のハチはマンションや共同住宅の2階以上で発生したため、量に発生するタバコシバンムシがその宿主とされ、駆除業者による駆除法も確立されたため被害が減るかに思えたがしばらくはその被害が続いたようです。50年代に入って突然出現したのには量に使うわらが日本の農業の機械化の推進により国産のわらが少なくなり、外国からの輸入に頼ったためではなかろうかと言われていいます。猛威をふるったこのハチも60年代に入ると被害のうったえが何故か激減したようです。

4. アタマジラミによる被害（環境衛生課当時～）

同じく昭和53年頃から小学生や幼稚園・保育園の園児を中心として被害が急増したのがアタマジラミで、昭和46年に塩素系殺虫剤のDDTやBHCが製

造・使用禁止になったことや、その頃から海外との交流・旅行が盛んになったことが原因ではなかろうかと言われています。アタマジラミは人の頭髮に寄生し、集団生活の場で人から人へうつるので根絶が難しく、昭和56年には人の体に直接使うことのできる安全な殺虫剤が市販されるようになったにもかかわらず、今現在も被害がなくなるに古くて新しいやっかいな害虫となっています。

5. ホタルの飼育と調査（豊中市当時）

昭和57年から59年にかけて豊中市下水道部に出向し、ねずみ衛生害虫駆除指導とともに表記の業務をてがげました。豊中市は当時すでに下水道の普及率が90%をこえて市内の水路の汚染もかなり改善されてきており、かつては市内各地の水路や水田周辺で見られたホタルをもう一度よびもどすことを最終目標とし、とりあえず下水処理場の高度処理水でホタルを飼育することを目指して飼育室で飼育を始めたわけです。ガラスの水槽を利用したり、コンクリートねり用のプラ容器を何段も並べて上から順々に水を流す装置を作ったり、紆余曲折の繰り返して2年間はあっというまに過ぎたように記憶しています。その間ヘイケボタルとゲンジボタルの室内飼育はなんとか成功したものの、自然に近い状態の人工水路でのゲンジボタルの飼育は餌のカワニナの繁殖が難しく、なかなか短期間の実験では思うようにいかなかったものです。その後下水道処理水を利用した水路でのホタルの繁殖には成功し、毎年6月中旬には大きな網舎の展示施設でホタル観察会を開催し豊中市民の皆さんに楽しんでいただいているようです。

また豊中市在職中に記憶に残った衛生害虫では庭木の害虫で刺されると痛いヒロヘリアオイラガ、新築住宅やマンション等の室内で被害の多かった小型のツメダニ・ケラカロブティス、市職員が駆除や巢の取り除きを実施しているスズメバチ類・ミツバチ類に対する対応の仕方でした。

6. 特定建築物におけるチョウバエの調査（枚方保健所当時）

昭和59年の夏季に表記調査を浄化槽・排水槽・湧水槽等の污水处理施設を対象に実施した。本調査は前年の夏に実施したゴキブリの調査で特定建築物内に設置した粘着シートに多数のチョウバエ類が捕獲

されたため、その追跡調査として実施したものです。

この2年間の調査結果からチョウバエ類の成虫は建築物内のあらゆるところで捕獲されており、污水处理施設が大量発生源であることはいうまでもないが、電気器具売り場や衣料品売り場等のトイレ以外では水まわりの無い所でもかなり捕獲されています。これはチョウバエが発生源からかなり移動するためなのか、休憩室や守衛室のような所になかなかチェック出来ない水まわりがあり発生するのか今回の調査では判明しなかったようです。

7. ネコノミの調査（門真保健所当時）

前任の枚方保健所当時からノミの相談がかなりよせられていたが、門真保健所へ転動した1年目に年間20件余の相談があり、現地調査や聞き取り調査の結果その大部分がノラネコのお産とその後の子育てに伴うものと推定された。そこで昭和63年の春から秋にかけて実態調査（聞き取り調査・駆除・その後の発生状況調査等）を実施した。ノミの種類はほとんどがネコノミでイヌノミは2件のみで、念のため調べた飼犬のノミもネコノミという例があった。被害の発生場所は天井裏、床下、物置、縁の下等の人の近づけないところであった。被害の発生時期はノラネコの巣離れの時期からしばらく続き、同じ場所でも2年続けて発生することはなかった。駆除には市役所より散粉機（肩掛け・手まわしのもの）を借り、殺虫剤は有機燐薬剤の粉剤を用いた。散布場所はノラネコの巣があったと予想される場所（子猫の鳴き声をよく聞いた場所）に集中した。駆除後のアンケート調査では効果が十分確認された。被害の多い住宅は空き室の多いアパート、大きな農家、納屋、倉庫、工場のすみ等であった。

ノミの発生現場へ行くときはノミにとりつかれることは避けられません。ゴム長靴に白い靴下、白っぽいズボンといういでたちで作業をし、帰りの車の中でよくノミ取りをしたものです。

以上が私の衛生害虫に関する思い出のベスト7です。それでは現職の昆虫館を紹介させていただきます。

箕面公園昆虫館

昆虫館のある箕面公園は大阪の中心部から北へ約25kmの、阪急電車の梅田駅からわずか40分程で公園の入口に達するという交通の便利な所にあります。公園内の箕面の滝までの約2kmの溪谷には、高さ33mの大滝や、樹間に映える清流が、四季おりおりに美しく装いを変えます。特に秋の紅葉は多くの人々に親しまれてきました。また緑豊かで樹の種類が多い箕面公園は昆虫の宝庫としても古くから知られています。この豊かな自然と昆虫を皆様にご紹介するため、昆虫館は昭和28年に開設されました。その後昭和56年に鉄筋コンクリート造りに建て替えられました。(現在の標本展示館)そして平成4年7月のパークセンターの建設にともない、亜熱帯風の花と緑にあふれ、一年中生きた蝶が舞う放蝶園をもつ昆虫館がリフレッシュオープンしました。(写真1)

展示の見どころ

1) 箕面の昆虫コーナー

箕面公園と箕面川の昆虫類を大型パネル、生態写真および昆虫標本により紹介しています。

2) ジオラマ

「箕面川沿いの自然」と題して、V字形溪谷に自生するモミジ・アラカシ・アオキ・コナラなどの植生とそこに生息するテングチョウ・コクワガタ・ミヤマカワトンボなど70種類の昆虫類の生態を実物そっくりに表示しています。

3) 放蝶園 (生態観察温室)

一年中20℃以上に保たれた温室では、いつも生きた蝶を見ることができます。キチョウ・アゲハ・ツマグロヒョウモンなどの箕面周辺で見かける蝶や、オオゴマダラ・シロオビアゲハ・カバタテハなどの南国の蝶まで、200匹以上の

蝶が舞い、花で蜜を吸い、葉の上で羽をやすめます。水辺ではアメンボ・ガムシ・ミズカマキリなどの水棲昆虫類も姿をみせます。(写真2)

4) 標本展示

蝶を模した展示館では、わが国のおもな昆虫類をはじめ、珍しい外国産の昆虫類(主としてタイの昆虫類)約2500種-9000点の標本と約250枚の昆虫生態写真(撮影者は前館長の斉藤寿久氏)が展示されています。(写真3)

5) ミニ生態室

タガメ・ゲンゴロウ・ヤゴなど約10種類の水棲昆虫類は常時、カブトムシ・クワガタムシ・キリギリスなどはその発生時期に展示しています。

箕面公園は今も昆虫の宝庫です。沢山の昆虫類が四季おりおりに発生しています。昆虫を通じておおいに自然と親しんで欲しいものです。

● 箕面公園昆虫館

大阪府箕面市箕面公園1-18(〒562)

電話/0727-21-7967

入館料/大人 250円(170円)

小人(中学生以下・4才以上)

100円(70円)

* () 内は団体30人以上

交通/阪急電車宝塚線で石橋駅乗り換え箕面線へ、終点の箕面駅下車し、北へ徒歩13分

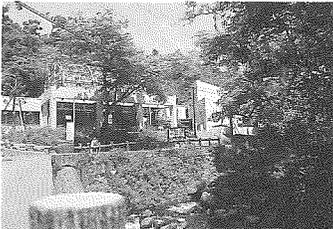


写真1



写真2

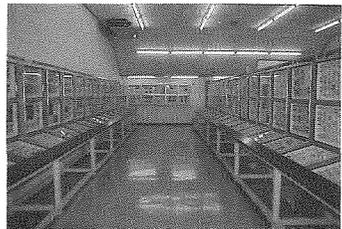


写真3